

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 新幹線殺人事件

¥350

昭和45年8月25日 初版発行

昭和46年3月1日 32版発行

著者 ^{もり}森 ^{むら}村 ^{せい}誠 ^{いち}一

神奈川県厚木市緑ヶ丘4-3-141

発行者 五十嵐 勝彌

印刷者 磨田 照雄

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替東京115347

株式会社 光文社
電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。【榎本製本】

表紙の模様・意匠登録 116613

© Seiti Morimura 1970

(分) 0-2-93 (製) 02179 (出) 2271 (0)

長編推理小説・書下ろし

しん かん せん さつ じん じ けん
新幹線殺人事件

もり むら せい いち
森村誠一



カッパ・ノベルス

目次

ひかり66号の死者	5
北のサナトリウム	16
女の武器	22
万博戦争	34
こだま166号の容疑者	45
二つの発信	59
三点確保のアリバイ	69
醜聞 スキャンダル・メイキング の捏造	74
不信の情熱	93
三体の傀儡 かいらい	106
真空の発信源	118
水平思考アリバイ	129
ジェット・ストリーム	138
無関心の鉄の檻 おり	155
醜い栄光	162
ふた股 また の参考人	170
連続の推測	183
移動の断絶	200
絢爛 けんらん たる痴態	210
垂直の盲点	213
北帰行	225

イラストレーション

司^{つかさ}

修^{おさむ}

ひかり66号の死者

1

十月十四日火曜日午後七時五十分ごろ、ひかり66号は終着の東京駅へ近づきつつあった。西神田にしかんだの中小商事会社へ勤める松田久男まつだひさおは、下車するための身支度を調える、軽い尿意をおぼえたので、駅へ着く前にトイレへ行っておこうと思った。

東京駅からすぐ自宅へ帰れるわけではない。いったん会社へ行つて報告をしなければならぬのだ。今日の大阪への出張も、朝早く東京を発つての日帰りというモーレツさである。

まったく人使いの荒い会社へはいったものだと思つた。もつともこれは、東京―大阪を三時間で結ぶ新幹線にも責任の一端があるかもしれない。身体もえらいが、出張旅費を浮かすこともできなくなった。

それならせめて乗っている間に、トイレでも使つてやろうか。

松田は用足し後そのまま降りるつもりで、カバンを下げて通路へ出た。このごろは六月に開通した東名高速道路に食われるためか、あるいはこの時間帯特有の現象なのか、車内に客の姿はチラリホラリである。

トイレの前へ来ると、誰でも同じことを考えるものか、二つとも「使用中」である。軽く舌打ちをした松田は、少し前方の車両へろがグリーン車（もとの一等）であることに気がついた。

「トイレぐらい一等を使わせてもらつてもいいだろう」グリーン車へのこのこはいって行つた松田は、こちらのハコが普通車よりもさらに客が少ないのに愕おどろいた。

「これじゃあ若い女の子なんか恐いだろうな」

松田はよけいな心配をした。

進行方向に向かって通路を進んで来た彼は、客の後頭部を見て進むような形になったが、目に映るのは、客の頭を乗せていないシートカバーの空むなしい白さである。

通路ドアをはいってすぐ右側の窓ぎわのシートに、よく寝入っている客がいた。シートの背もたれと窓ガラス

が直角に交差する、ちょうど角になった凹みに頭をもたせかけてぐっすり寝入っている。

(もうすぐ終着だというに、のんきな人だな)

松田は内心感心しながら通り過ぎようとした。そのとき彼の視線は、その客の足もとにたまっている赤黒い粘液のようなものを何気なくとらえた。

「眠っている間に、トマトケチャップでもこぼしたのかな？」

しかしそれにしても新幹線の車内にトマトケチャップなんか、なぜ持ちこんだのだろうか？

行きずりの人間として行き過ぎようとした松田の足がふと硬直し、目に不安の影が走った。

「まさか！」

彼は心をよぎった恐ろしい連想を打ち消した。

「テレビの見過ぎだ」

だが松田の目は、自分の意志に関わりなく、客の足もとの液体に吸いつけられていった。もう行きずりの人間の無関心の目ではなかった。尿意は完全に去っていた。

車内灯の光を受けて、その液体は、見るからに生臭そうに光った。目を足もとから上へ上げる。蛍光灯のせい

か、血の気を失った蒼白の横顔、窓に押しつけるようにして眠っているの、はつきり人相は読みとれない。

「もしもし」

松田はおそろるおそろる声をかけた。

「もうすぐ東京駅ですよ」

答はなかった。松田はシートの間に身をさし入れて相手の肩をゆすろうとした。

松田が愕然として硬直したのはそのときである。

「し、し、死んでる！」

舌がもつれた。松田は旅客の左の胸のあたりが、足もとにたまった同じ液体でぐっしりと濡れ、なおもじくじくとあふれ出ているのを見た。黒っぽい背広に、黒いワイシャツだったために通路からはつきりと見分けられなかったのである。

列車は新橋付近の高架を走っていた。両側の車窓を多色なネオンがきらびやかに流れている。

「どうかしましたか？」

下車支度をして通路をやって来た他の乗客が、ただごとでない松田の顔を見て訊いた。

「た、たいへんだ！ 殺されてる、しや、車掌はどこで

すか!」

今度は、尋ねたほうの乗客が驚く番だった。

2

ひかり66号は死体に乗せたまま東京運転所へ入れられた。殺人事件とあって、警視庁からの特別の要請があったからである。

「事件番」にあたった捜査一課の大川^{おおかわ}部長刑事は、おなじ班の同僚七名とともに、新幹線基地のある品川^{しながわ}へ向かった。入線と出構でビッシリと埋められた東京駅に、たとえ殺人の発生した車両といえど定められた時間以上停めておくことはできない。

線路容量の限度に達しているダイヤに数分の狂いが生じて、あとにつづく特急や支線の連絡に、大きな波紋を広げてゆく。たかが一人の人間の死のために、無数の人間の足を乱すことはできないのだ。

かといって、東京駅へ死体をおろしてしまえば、犯罪捜査の原点であり、資料の宝庫でもある現場が失われる。

問題車の品川基地への入庫は、警察と国鉄のぎりぎり

の歩み寄りだった。警察が歯ざしりしてくやしがつたことは、死体発見が東京駅到着とほとんど同時であったために、問題の車、七号のグリーン車に乗り合わせた乗客が全部降りてしまったことである。駅務員からの通報によると、発見者の松田は、隣りの普通車から通りかかっただけにすぎない。

「面倒な事件^{やま}になりそうだな」

大川は現場へ向かうパトカーの中で、自分とコンビを組んでいる若い下田^{しもだ}刑事へ言った。

「新幹線となると、乗客が無関心ですからね」

「その無関心な乗客すら散ってしまった。こりや下手^たすると目撃者がつかまらんぞ」

「公開捜査ということになりますか」

「まあな」

大川は大して期待もしていないような口ぶりで言った。

大都会の生活者は自分の生きることや、楽しみを追うのに忙しく、誰が生きようと死のうと無関心である。東京―大阪を三時間で移動させる新幹線は、日本を代表する二つの大都会の「動脈」であり、「袖すり合うも他生^{たじろ}

の縁」式の旅情など、かけらも見当たらない。

向かい合わせだった仕切座席は、すべて同一方向を向き、旅客はプライバシーを得た代わりに、乗り合わせた乗客の後頭部や、硬く冷たい横顔を見るだけになってしまった。

現代の旅の最大のエチケットは、隣りの乗客にみだりに話しかけないことだそうである。だから、同じハコで人が殺されているのに、たまたま通行した者が発見するまで気がつかないという、途方もない事件が起きるのだ。

大川は心の中がしだいにうそ寒くなってきた。パトカーは間もなく「現場」へ着いた。運転所の建物から、副所長に案内されて、問題のひかり66号をおさめた検修庫へ向かうと、整備中の新幹線の車体が、基地内の留置線に幾重にもたたなわって見える。

整備が終わってターミナルへ向かって動きだして行く列車もあれば、いま規定の距離を走り終えて帰って来たばかりのものもある。前者は潑刺として、後者は何となく疲れて、うす汚れているように見えるから不思議である。「なかなか壮観でしょう。東京―大阪間を二往復半走り

終えた車は、東京駅からいったんこの基地へ整備のために帰って来るんですよ」副所長が説明した。

ひかり66号は運転所の検修庫にひっそりと停まっていた。二両一単位で機器類を分配された新幹線車両は、七号車だけ切り離すことがむずかしいので、運転編成のまま停留されていた。死体を乗せているうえに時速二百キロの高速を失ってみると、国鉄自慢の新幹線のスマートさがだいぶ損われてみえる。

死体は発見されたときから、誰も手を触れた者はいないはずである。ハコの傍では現場保存の制服警官と鉄道公安官が挙手の礼をして迎えた。

すでに現場には、所轄である高輪署の刑事らが先着していた。

「ご苦労さまです。こちらが発見者の松田さん、こちらが66号に乗務した専務車掌の渡辺さんです」

すでに大川とは顔見知りの仲である高輪署の木山刑事が、三十前後のサラリーマン風の男と車掌を紹介した。これでこの男は今夜の帰宅は、確実に「ごぜんさま」になるだろう。しかしこれは殺人事件なのである。しかも松田だけが、無関心な乗客の中からただ一人ひっかつ

た“かも”であってみれば、そうは簡単に“釈放”するわけにはいかない。松田は自分の要領の悪さを内心嘆いているようである。彼と一緒に死体を見つけた乗客は、かかりあいになるのをおそれていち早く姿を消してしまつた。

現場鑑識班が現場の外周から中心部へ向かつて綿密な観察をはじめた。大川刑事は死体を一見して、まだ犯行後あまり時間が経っていないことを知った。被害者の年齢は三十半ば、筋骨質のなかなかの男前である。

現場観察と並行して、松田と車掌に対する事情聴取が行なわれる。

「あなたが死体を発見した時間は、正確に何時でしたか？」

「東京駅へ着く直前でしたから、十九時五十二、三分だと思っています」

松田は答えた。

「ひかり66号は、十六時四十五分に新大阪を発車し、十九時五十五分に東京へ着きます。今日は定時どおりに運転されました」

かたわらから渡辺車掌が説明を補足した。

大川はうなずいて、

「発見したときに、車内に何人ぐらい乗客がおりましたか？」

二人のどちらにともなく訊いた。

「たしか四、五人だったと思います」

「最終検札を名古屋を過ぎて行ないましたが、やはりそのくらいでした」

松田と渡辺が順次答えた。

「松田さん、あなたが発見したとき、もちろん隣席には誰もいなかったでしょうな？」

隣りに乗客がいれば、その人間が発見したはずである。だが大川はあえてその質問をした。

「はい、もちろんおりませんでした。隣りどころか、この人の周囲には誰も腰かけておりませんでした」

松田は、グリーン車へはいったとき、シートカバーの白さがいやに目立っていたことを思い出した。

「渡辺さん、そちらの記録では、被害者の隣席はどうなっておりますか？」

大川はもし隣席がキープされておれば、その主こそ犯人として最も疑わしい位置にいる者だと思ったのである。

る。

「隣席、つまり七号車1Bは、売られておりますが、大阪からずっと空いておりました。検札のときにも腰かけていた者はありません」

「何ですって!？」

「それだけでなく通路をはさんで、同じ並びのCD席も、切符だけ売られておりながら、ノーショウでした。つまり、お客さまが乗らなかったのです」

渡辺は意外な事実を告げた。

十二両編成のひかりは、大阪寄りから一号車二号車と数える。車内の座席番号も大阪寄りからで、横に海側（大阪へ向かって進行方向左）からABとなる。グリーン車は四人がけであるから、通路をはさんで反対側がCDとなる。

車掌の申立てによると、被害者のいた席の並びの席は、すべて切符が発売されておりながら「不乗」になったというのである。ここに犯人の計画の匂いが感じられた。

なるほど凶行のあったひかり66号はすいていたが、当日、確実に空いているという保証はない。発見を遅らせ

るために、被害者を窓ぎわのA席へすわらせれば、最小限その隣のB席は空いていなければならない。

さらに通路をはさんだ並びのCD席を買い占めておけば、「仕事」はぐんとやりやすくなる。一番後部の席を選んだのも、そのためであろう。

「ノーショウになった席はどうするのですか？」

大川は緊迫した口調で訊いた。

「全席指定席ですから、ノーショウになっても空けておきます。それにすいておりましたから、取消し待ちの客へ譲るといふこともあります」

松田は六号車の方からはいつて来た。したがって1Aのシートにいた被害者を七号車へはいつてすぐ右側へ見る形となった。

「この時間のひかり号は、そんなにすいているもんなんですかなあ」

とにかく刑事には、同じハコで殺人がおきているのに通行人が発見するまで、乗り合わせた客が気がつかなかったというのが、どうにも納得できないしかなかった。

「日によって多少のちがいはありますが、概してこの時間帯の上りはすいております。特にグリーン車はガラ空

きですね。どうも「東名」に食われたらしいのです。こちらで本氣に対策を考えないと」

渡辺は職業意識を出した。だが大川には国鉄の営業上の問題はまったく興味がなかった。

もし犯人が、ひかり66号の座席占拠率をあらかじめ知っていたとなると、かなりの計画性が感じられてくる。「ところで松田さんは、このハコをちょうど通りかかって死者を発見したということですが、出口は普通車にもあるのに、何故、わざわざ、こちらへやって来たのですか？」

「トイレへはいりたかったんですよ。あいにく普通車のほうがふさがっていたものですから。し、しかし、僕は別に」

松田は刑事に疑われたと思ったらしく、途中で口をとがらせた。同時に彼は猛烈な尿意を覚えた。発見時以来すっかり忘れていたものを、刑事が思い出させてくれたのである。

「いやいやご心配なく。ただ参考までにうかがっただけですから」

大川は少し慌てて言った。すべてを疑うのが刑事の務

めだが、不用意な言葉を使って善良な市民の、しかも今のところ唯一人の貴重な協力を失ってはならなかった。

現場観察は順調に進行していた。

被害者は鋭利な刃物で心臓を一突きにされていた。おそらく声もたてずに死んだものと思われた。他に創傷はない。凶器は発見されなかった。犯行後、犯人が持ち去ったものらしい。

このような公共的な乗物の常として、現場および周辺から特に犯人のものと推定されるような資料や遺留品は、何も発見されなかった。

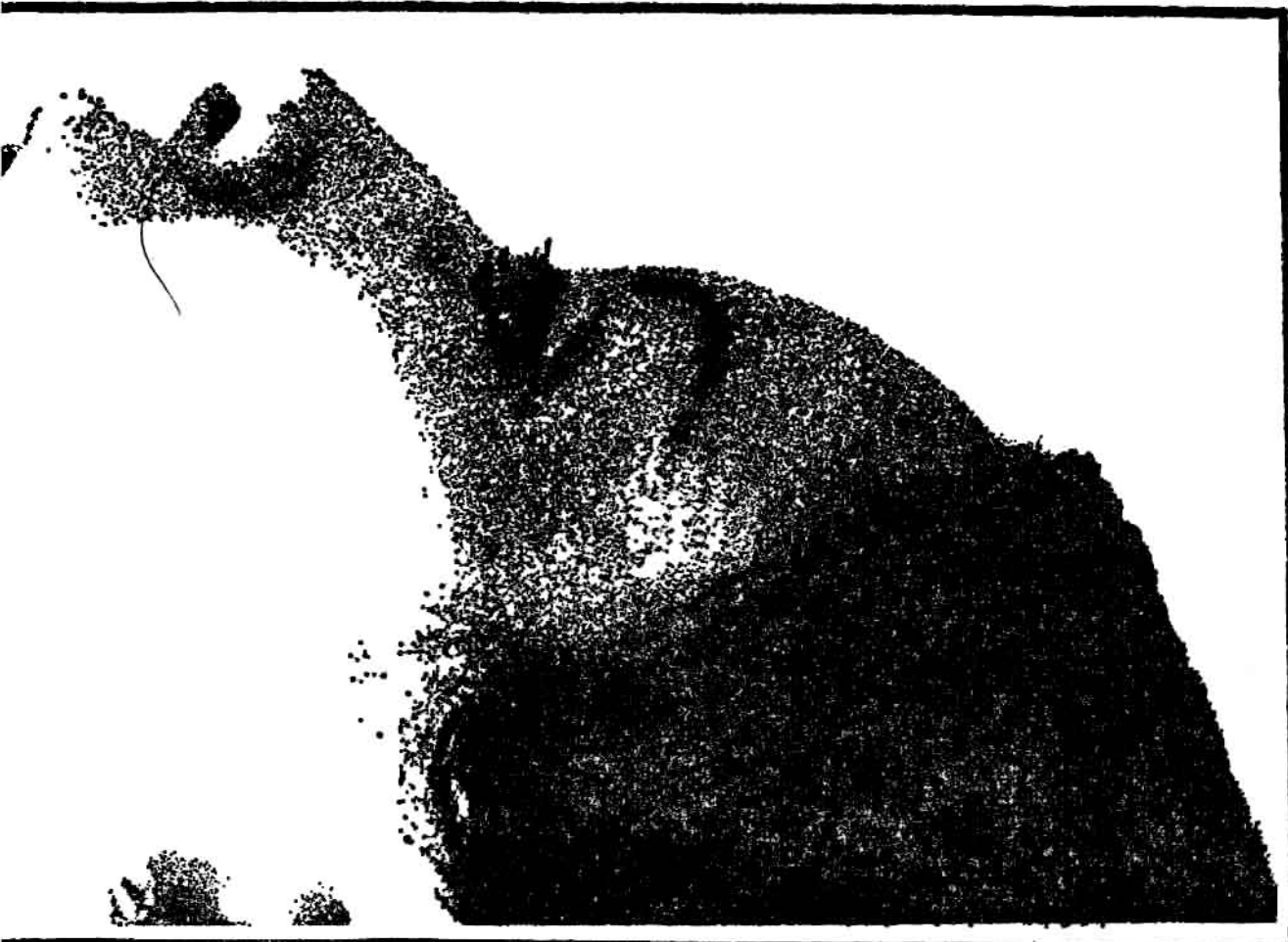
携帯品から、死者の身元は山口友彦(34)、大阪市西区阿波座中通一(あわぎななかつり)の四二、新星プロダクション事務局長ということがわかった。

「芸能プロの事務局長か」

大川は死者の名刺を見ながら目を光らした。

新星プロは、売れっ子タレントを多数かかえた関西随一の芸能プロダクションとして、大川もその名前を週刊誌の特集記事などでみかけたことがある。

スターという虚名の座をめぐる醜悪な争いとスキャンダルの渦巻く、芸能界の人間が殺されたとなると、



「まず痴情怨恨ですかね」

下田刑事が大川の思惑を見ぬいたように言った。

「あまり先入観はもたんほうがいいな」

だが大川は慎重なものいいをした。山口の自宅の住所がわからなかったのも、ともあれ大阪の新星プロに緊急連絡がとられて、家族に遺体の確認に来てもらうように依頼した。

電話に出た者の答によると、山口は独身で家族はなく、社長の緑川明美が日航の夜行便で駆けつけるということになった。

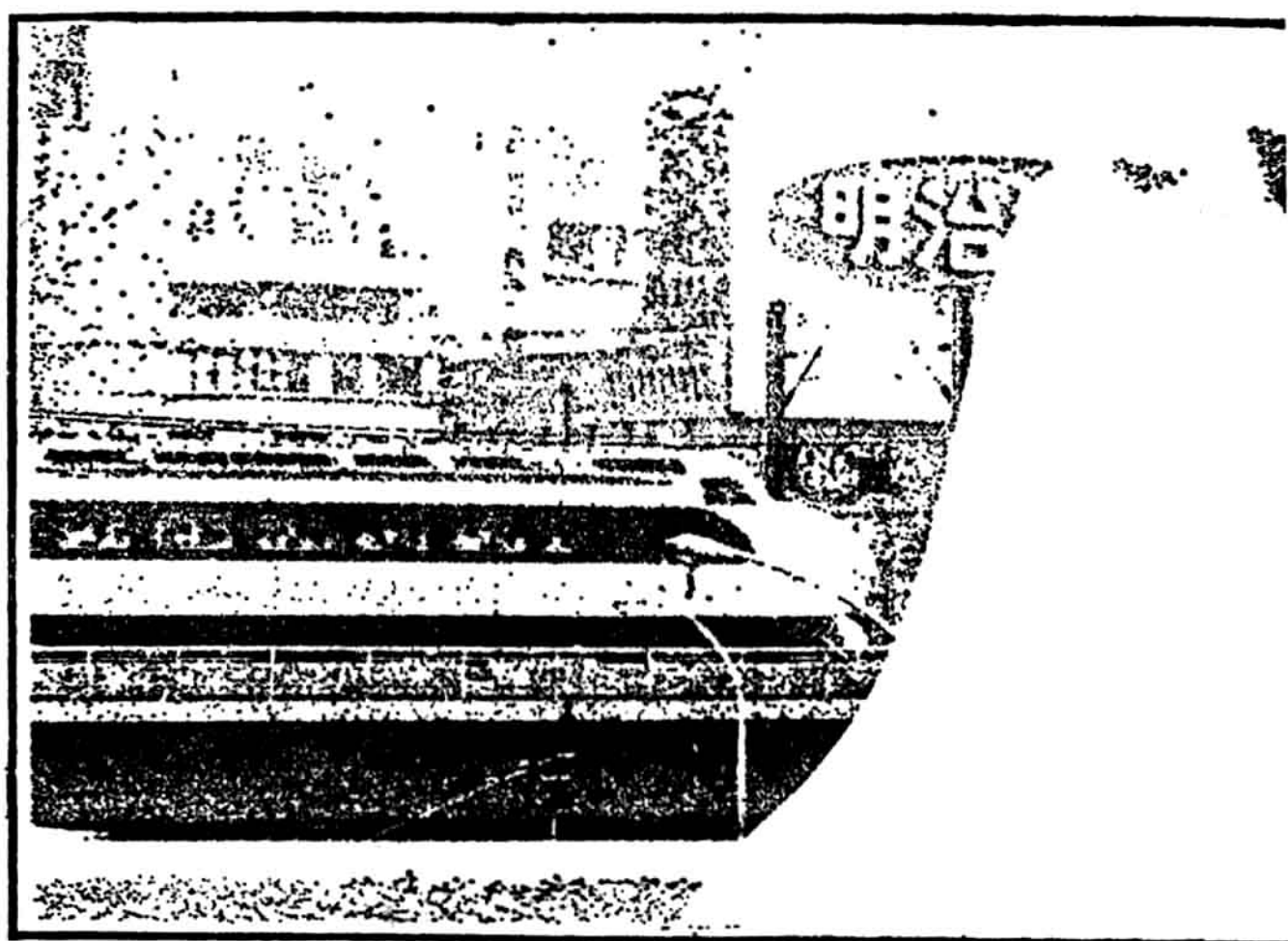
「緑川明美がじきじきに来るのかい。するとこの被害者は、相当の大物なんだな」

所轄署から来た佐野刑事がいった。

「緑川明美ってのは、そんなに大した女なのか？」

名前だけは知っていたが、芸能界のことにはあまり興味がない大川は訊いた。

「東京の“キクプロ”に対抗する、関西では一番勢力をもっている“新星プロ”の社長でしてね、タレント学校の経営はやる、音楽出版はやる、なかなかのやり手ですよ。何でも今度の万博じゃあプロデューサーになると



か、ならないとかいわれていますね」

若い佐野はさすがにそのような事情に通じていた。捜査一係の若手刑事として凶悪犯を追いかけていても、非番になればグループサウンズやポピュラー音楽にしばらく若者の一人だった。

夜もだいたいぶ遅くなっていたので、松田と渡辺車掌には一応引き取ってもらうことにして、死体は緑川明美に確認させてから解剖することになった。

一同は張番の警官だけを残してひとまず運転所の事務室へ引き揚げた。副所長がいてくれたお茶が十月の夜気に冷えた身体に沁みるように美味い。茶の好きな大川は、いい茶を使っていると思った。

事務室には、勤務を終わり、いったん帰宅した所長も出て来ていた。そのほか国鉄の幹部らしい男が何人かいた。

国鉄でもドル箱の新幹線の車内で人が殺されたものだから、事件をかなり重大視しているらしい。

「国鉄本社の村野です。今夜はどうもご苦労さまです。それで事件の見通しはいかがですか？」

その中で一番恰幅のよい男が、係長の石原警部に名刺

を渡しながら訊ねた。

「見通しといわれても、まだ何ともお答えできる段階ではないのですが」

「他殺ということは確定したのですか？」

「解剖した上でないと確定とはいえませんが、死体の情況から見て、まず他殺であると考えております」

石原警部の口調は慎重だった。凶器が発見されないことや、創傷の外形などから、解剖結果を待たずとも他殺であることはわかっていたが、外部に対する判断となると、外景検査だけの検屍^{けんし}によって断定的な言葉は下せない。

「他殺となると、そのう……車内で殺されたということ
は確かなんでしょうか？」

「とおっしゃいますと？」

「つまりですね、車外のどこかで殺されたあとで、車内へ運びこまれたということは考えられませんか？」

村野のハハは読めた。ひかり号の車内が人が殺されるような物騒な場所であると一般に印象されては困るのだ。それでなくとも、飛行機や自動車に蚕食^{さんしょく}されて、客足が伸びなやんでいるこのごろなのである。

しかしいくら国鉄が困っても、被害者を襲った死が瞬間的なものであり、流下した血液の状態などから、車内が犯行現場であることは明らかであった。第一、すでに死んでいる人間を車内にかつぎこむことのほうが、はるかに人目を惹く。たとえグリーン車がすいていたとしても、殺害した場所から駅の構内まで大勢の目から隠し通せるものではなかった。

石原警部にてもなく打ち消されて、国鉄側はしゅんとなった。

「外景の観察だけですが、被害者が殺されてからまたあまり時間は経過していませんね。おそらく松田さんに発見される直前に犯行を行なったのでしょう」

「すると横浜あたりですか」

「とははつきり断定できませんが、ひかり号は名古屋から東京まで停まりません。渡辺車掌が名古屋を過ぎて検札をしたときは、被害者は生きていたのですから、犯行がその後であることは確かです。あまり早く犯行を行なつて東京駅のはるか手前で死体を発見されると、犯人に現場から脱出するチャンスがなくなってしまうです。とにかく東京駅までは犯人は車内にカンヅメにされているの

ですから。

だから犯行は東京駅にできるだけ接近した場所で行なわなければならなかった。発見と同時に東京駅へ到着するくらいに近い場所です。解剖結果が出ないと断定できませんが、死体の筋肉硬直や、流下した血液の凝固状態から判断しても、犯人はまさにその通りに行動したことが推定されます」

石原警部は慎重に言葉を選んでいたが、口調は自信のほどを示していた。

緑川明美が到着したのは午後十一時を回ったところであった。日本の芸能界をキクプロの美村紀久子と二分する

花やかな中に一種の貫禄があ

るものであることを認めた。

おわさずに友彦の死体をみつめ

「とうとうこんな姿に

って、だからあの女には近づか

ないようにと言ったの

ポツンともらしたの

八川刑事が耳のはしに聞きとめ

た。周囲の捜査官の誰

か聞きのがしたような低い囁き

声であった。

「あの女とは誰のことですか？」

大川が訊き直したとき、明美の示した反応は、彼女が低い囁き声ではありながら、手近にいた大川に確実に聞こえるように作為して言ったものであることを示していた。

明美は、その女が誰であるかを捜査官に話したがっている。

「私が言ったということは伏せていただけですか？」

明美はそれでも思わせぶりにぐずついている。

「それは内容にもよりますが、こちらとしては協力者や参考人の不利益になるようなことはしないつもりであります」

「キクプロの美村紀久子さんですわ。山口は最近、美村さんにだいぶ接近しておりましたから」

「そのことがこの事件とどういう関係があるのです？」

「キクプロと私たちは、万国博プロデューサーの椅子をめぐって激しく対立しておりました。幸いに万博準備委員会が私たちの企画に興味をもち、新星プロの旗色がよかったのですが、美村紀久子は山口を籠絡して裏切らせ